



日本古代史教育における騎馬民族文化の教材研究

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 芳信 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00004380 |

日本古代史教育における騎馬民族文化の教材研究

遠藤 芳 信

I 東アジア世界からみた日本古代史学習の計画について

本稿は、江上波夫（1906年生まれ、現在、東京大学名誉教授）の騎馬民族国家論を中心にして、日本古代史教育における騎馬民族文化（*culuture of equestrian people*）の基本的な位置づけを考察するものである。また、その騎馬民族文化の教材研究としては、高等学校日本史教科書の代表的記述を検討素材にするものである。

ところで、筆者はこれまで、日本古代史学習を東アジア（あるいは中央アジア）世界の国際的環境から位置づける場合、特に古代天皇制の成立を重視しつつ、考古学、民俗学、神話学、文化人類学、宗教史、等々の研究成果に注目し、とりあえず次の三つのテーマが重要であると述べたことがある。⁽¹⁾すなわち、①弥生時代において、「倭国」と称された日本と南朝鮮および中国江南・華南地方やインドシナ半島との関係であり、特に稲作農耕文化にかかわるテーマ、②古墳時代における巨大古墳造成と北西アジアの騎馬民族・遊牧民族の文化的影響のテーマ、③飛鳥・奈良時代における古代中国思想（特に道教思想）の文化的影響のテーマ、である。本稿は、東アジア世界からみた日本古代史学習の計画においては、上記の②に相当するものである。⁽²⁾まず、江上波夫の騎馬民族国家論の骨格と意義を考察してみよう。

II 江上波夫の騎馬民族国家論の意義

江上波夫の騎馬民族国家論は、1948年5月4・5・6日に東京でおこなわれたシンポジウム「日本民族の起源」（出席者は、石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎）において初めて公表されたものである。同シンポジウムの速記録は、日本民族学協会編『民族学研究』第13巻第3号（1949年2月）に掲載された。⁽³⁾江上の提起した学説は、戦後日本社会における皇国史観批判、昭和天皇の「神格否定宣言」、絶対主義的天皇制から象徴天皇制への移行、等のなかで、大きな反響をよびおこした。江上はその後、自説を、1964年6月の仙台でのシンポジウム「日本国家の起源」（後に、石田英一郎編『シンポジウム・日本国家の起源』に収録）や、「日本における民族の形成と国家の起源」（『東洋文化研究所紀要』第32分冊、1965年3月、東京大学東洋文化研究所）等において発表・展開した。そして、これらを一冊の単行本として詳細にまとめ、1967年11月に、『騎馬民族国家——日本古代史へのアプローチ』（中公新書）を公刊した。⁽⁴⁾江上の同書は自説を体系的・構造的にまとめあげたものであるが、そもそもの最初の自説発表当時から多くの賛否論を生み出した。⁽⁵⁾本稿では主に、1980年代以後の新たな研究動向に注目しつつ、江上の騎馬民族国家論の意義づけをおこなうものである。⁽⁶⁾

江上の騎馬民族国家論はスケールが大きく、かつ、研究方法論としても構造的である。江上は、古代日本における民族の形成と、国家の起源を区別・関連させて把握している。すなわち、日本民族の形成の問題と

しては、水稻稲作農業の展開であり、主に弥生時代に相当する。他方、国家としての起源としては、世界史的動向・東アジア情勢とリンクさせた騎馬民族の問題であり、主に古墳時代後期に相当する。江上の騎馬民族国家論はいうまでもなく、後者の古代日本国家の起源をテーマにしたものであり、大和王権成立・形成をめぐる政治・軍事的支配の論理や権力関係のシステムの論理である。この点を最初に明確に確認しなければならない。なぜなら、江上説に対する批判論者においては、後述するが、騎馬民族・遊牧民族等の文化様式・民俗・風習等がその後の日本に「あらわれていないのではないか」というような「理由」のもとに、古代日本に騎馬民族は来なかった云々——すなわち、江上の学説の中核から離れたもの——の「批判」をする者が絶えないからである。もちろん、江上説は、騎馬民族・遊牧民族等の文化様式・民俗・風習等をも十二分に展開していることはいうまでもない。

江上説の研究方法的概要は次の通りである。

(1) 考古学的アプローチ

第一に、古墳およびその出土品・遺物・副葬品を中心にした考古学的研究からのアプローチである。すなわち、江上は、まず、古墳時代を前期（3世紀末から4世紀後半中頃）と後期（4世紀末から7世紀後半頃）の二期に区分した。この場合、前期の古墳は弥生時代からの伝統をうけて、堅穴式石室をもち、鏡・剣・玉・石釧・鉄形石・車輪石等が納置されていることに注目し、非実用品が多く、宝器的・象徴的・祭祀的・呪術的・神権政治的・平和愛好的意義をもっている副葬品が多いとした。したがって、そこでの文化は、東南アジアの稲作農耕民族の特徴をもち、被葬者も主として司祭的性格をもった先住・土着の豪族とみなされるとした。他方、後期の古墳は、誉田山古墳（いわゆる「応神陵」）、大山古墳（いわゆる「仁徳陵」）等に代表されるような前方後円墳が多く、規模も壮大になり、横穴式石室が盛んにつくられるようになり、副葬品としては武器や馬具、食器・服飾品・男女・装馬・家屋・武器等の形象埴輪が納置されていることに注目し、軍事的・実用的・現世的・王侯貴族的な華麗なものが多いとした。そして、これらの後期古墳の副葬品の中で、特に武器・馬具・服飾品の大部分は、3世紀から5世紀にかけての東北アジアの騎馬民族としてのいわゆる胡族のものとまったく同類であると指摘した。したがって、後期古墳は前期古墳とはことなり、生活様式や死後の世界の観念にも根本的差異があったことが暗示されるとした。つまり、前期と後期の古墳の造成及び政治支配関係・文化等をめぐる変化は急激的・爆発的とみるべきであり、弥生人・倭人の自然成長的な自生的変容とみるべきではないと強調した。

以上の後期古墳の副葬品等にあらわれた東北アジア系の騎馬民族文化に関しては、当時の農耕民族の倭人や畿内政治勢力が国家建設事業の余力をかって朝鮮半島に進出した結果、日本に輸入したという解釈も生まれることもある。しかし、江上は、当時の大和王権が南朝鮮の征服活動にのりだす必然性が十分でないことを、一般に農耕民族が海外に征服活動をおこなう例はまれであること、前期古墳文化の内容上からみてもそのにない手が征服活動をおこなうための武力的要素にかけること等の理由のもとに、東北アジア系の騎馬民族文化輸入説は承服できないとした。そして、江上は、以下の八点の理由を述べ、前期古墳文化の倭人が、自主的な立場で騎馬民族的大陸北方系文化を受け入れて、自己の農耕民族的文化を変質させたのではなく、大陸から朝鮮半島を経由し、直接に当時の日本に侵入し、倭人を征服・支配した有力な騎馬民族が大陸北方系文化複合体をみずから帯同したきて、日本に普及させたと解釈するほうが、より自然であると強調した。以上の江上の八点の理由は次の通りである。⁽⁷⁾すなわち、①前期古墳文化と後期古墳文化とが、たがいに根本的に異質的なこと、②その変化がかなり急激で、そのあいだに自然な推移を認めがたいこと、③一般的にみて農耕民族は、自己の伝統的文化に固執する性向が強く、急激に、他国やあるいは他民族の異質的な文化を受け入れて自己の伝統的文化の性格を変革させる傾向はきわめてすくなく、農耕民族の倭人の場合も同様

であったこと、④後期古墳文化における大陸北方系騎馬民族文化複合体は、大陸・朝鮮半島と共通しているが、その複合体のあるものが部分的・選択的に日本に受け入れられたとは認められないこと、換言すれば、大陸北方系騎馬民族文化複合体が一体として何人かによって日本にもちこまれたものと解されること、⑤弥生時代ないし前期古墳文化の時代に、馬牛のすくなかった日本が、後期古墳文化の時代になって、急に多数の馬匹を飼養するようになったが、これは馬のみが大陸から渡来して、人は来なかったとは解しがたく、どうしても騎馬を常習とした民族が馬を伴って、かなり多数の人間が大陸から日本に渡来したと考えなければ不自然なこと、⑥後期古墳文化が王侯貴族的・騎馬民族的な文化で、その弘布が武力による日本の征服・支配を暗示させること、⑦後期古墳の濃厚な分布地域が軍事的要地と認められるところに多いこと、⑧一般に騎馬民族は陸上の征服活動だけでなく、海上を渡っても征服欲を満足せしめようとする例がすくなくないこと、したがって南朝鮮で騎馬民族の征服活動がおよんだ場合には、日本への侵入もありえないことではないこと、である。

なお、江上は、世界史上にあらわれた騎馬民族として、スキタイ（前6世紀以後、北コーカサス、南ロシア）、キョウド（前3世紀末に冒頓単于なるものが出る。自己を「天地生むところ」「天の子」「天の立るところ」と自認。蒙古高原の遊牧民族を統一）、トックツ、センピ、ウガン等があげられるが、その多くが天を信仰し、自己を「天子」「天孫」と称していたことを強調した。

(2) 比較神話学をふくむ広義の民族学的・歴史学的アプローチ

第二に、江上は、古事記・日本書紀（記紀）や朝鮮の神話伝承を分析し、建国説話における天神（アマツカミ、外来民族）と国神（クニツカミ、土着勢力・先住民族）との区別と、前者による後者の征服・支配の論理を重視した。そして、外来民族としての天神（特に、その天孫系・天皇系）の日本渡来コースを、中国東北地区・北朝鮮（夫余・高句麗）→南朝鮮（加羅・任那、現在の金海地方）→北九州（筑紫）→畿内、に想定した。この場合、神武天皇の諡号（ハツクニシラススメラミコト、初めて国を治めた天皇）と同一の諡号をもつ崇神天皇の宮号（ミマキイリヒコ〜御間城入彦。「ミマ」〜「任那」の語幹。任那という土地の城<居城>にいたという天皇の意味）に注目し、神武東遷伝説には外来民族の渡来征服事業が反映されているとした。すなわち5、4世紀初頭に半獵・半牧のツングース系の夫余・高句麗とも関係のある東北アジア系の騎馬民族（任那の王、先祖は北朝鮮の夫余、辰<秦>王家）が任那に本拠を置き、加羅を作戰基地にして、倭人の協力のもとに筑紫に侵寇したのが、崇神天皇の肇国事業であり、ニニギノミコトの天孫降臨で第一回の建国であるとした。すなわち、倭韓連合国の成立であり、連合国の倭王は加羅に「日本府」を置いた。なお、邪馬台国は以上の南朝鮮の情勢をいち早く察知し、畿内に東遷したとされる。次に、4世紀末から5世紀初頭にかけて、応神天皇（筑紫出身者とされる）を中心にして北九州から瀬戸内海を経て、畿内の河内・和泉に進出し、大和王権を創始したのが第二回の建国であるとした。この第二回の建国も土着勢力・先住勢力と婚姻関係を結び、あるいは連合・合作して政権をつくり、巨大前方後円墳の造成等によって権力・経済力を誇示し、しだいに大和・飛鳥地方に移転したと強調した。

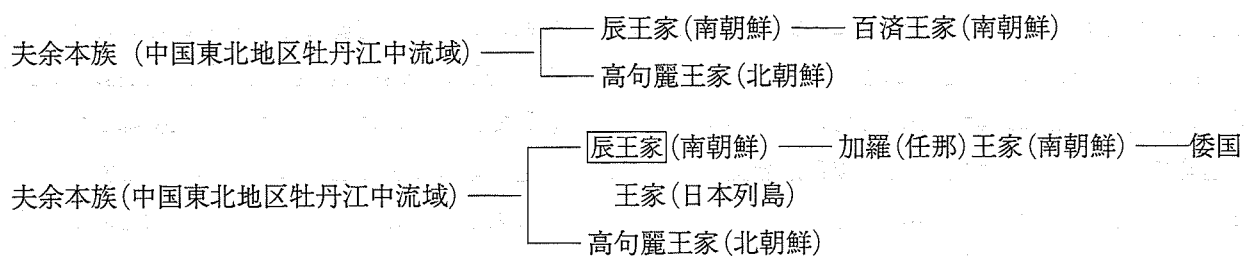
(3) 中国史研究における東アジア情勢と日本朝鮮関係を中心にした歴史学的研究

第三に、江上は、中国史研究における東アジア情勢や朝鮮半島・日本関係を中心にした歴史学的研究にもとづき、当時の日本・倭国の国際外交上の主権主張等を分析した。すなわち、『宋書』倭国伝などに明記されたところの倭国王（雄略天皇以前の数代の天皇、いわゆる「倭の五王」が南朝に使いをつかわした時に自己を「使持節都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王」と称し、あるいは「使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東將軍、倭国王」と号したこと

の意味の分析である。これらの爵号には、当時、現存しない南朝鮮の三韓時代の秦韓（辰韓）・慕韓（馬韓）と、現存する南朝鮮の独立国としての新羅・百済が構成国に含まれているが、三韓時代の弁韓は加えられていない。当時の倭国は、現実には任那（加羅）一国のみを直轄領にしていたにすぎないが、なぜ、過去の国々までを南朝鮮の支配権の中に含めたのだろうか、と江上は、分析する。この問題に関して、江上は、倭国王（その先祖）は、かつては馬韓・辰韓・弁韓の三韓時代に、その支配権を三韓全体に及ぼしていたという事実あるいは有力伝承をもとにして、現存する南朝鮮のすべてを支配する歴史的根拠・潜在的権利を保有しているという立場・主張をとったのではないかと考えた。したがって、秦韓（辰韓）にできた新羅も、慕韓（馬韓）にできた百済も、その支配権は過去にさかのぼると倭国に属するという主張になり、それを中国の南朝・宋に追認させるという立場をとったことになる。つまり、江上の考え方は、旧職名（元〇〇王）を併記した爵号に近いことになる。したがって、任那に関しては、倭国の現在の領有地になっているので、任那の前身の国の弁韓の支配権は宋に追認してもらう必要はなく、倭国の一国として含めなかったことになる。

ただし、三韓時代に、以上のように南朝鮮全体を支配した王や倭国王のなんらかの事実あるいは伝承が存在するかということに関しては、江上は、『魏志』東夷伝、『魏略』、『後漢書』東夷伝・韓伝、『旧唐書』東夷伝などを分析し、辰王という王を折出した。辰王は、外部から流移してきた人だったので、馬韓諸国の承認をえなければ、みずから立って王となることはできないが、実際は王位を世襲したとされている。辰王は、馬韓の月氏国に都していたが、三韓の地の大半を支配していたとされている。

その後、江上は、①「夫余隆の墓誌銘」（「公、諱名は隆、字も隆、百済辰朝の人なり」）～夫余隆は百済最後の王の義慈王の太子で唐が新羅と同盟して百済を滅ぼしたとき、唐側に捕らわれて長安に送られた。その後、新羅が強くなって、朝鮮半島から唐の勢力が追い出されるような形勢になったとき、唐は百済を復興して、新羅に対抗させることを計画し、夫余隆を楽浪郡王にして、朝鮮に行かせようとした。しかし、彼にはその意志がなく、中国で死んだ）、②『隋書』における隋使裴世清の来朝記事（飛鳥の都を「秦（辰）王国」と記述している）、などを分析し、夫余——辰王朝——日本天皇家と、夫余——辰王朝——百済王家との並列関係が明らかになると指摘した。⁽⁸⁾すなわち、



という同族関係の系譜が成立すると強調した。

(4) 大和王権と大陸騎馬民族国家との比較民族学的・文化史的研究

第四に、江上は、大和王権と大陸の騎馬民族国家、あるいは日本の古墳時代後期の文化と北方ユーラシアの古代騎馬民族文化との比較研究にもとづき、以下のような国家支配体制や風俗・文化面での特徴を提示した。

①国家支配体制としては、氏姓制における二元性がある。すなわち、(イ)「臣」の姓をもつ豪族（葛城、巨勢、平群、蘇我、吉備、和珥、紀、等の地名をとって氏の名としたもので、土着・先住勢力）は、畿内の周辺部や、大和と特定地方に多い。これらの豪族は天皇家と婚姻関係をもち、政治的結合によって天皇家とともに大和王権を構成し、いわば地縁的存在で国神系統に属する氏と想定される。(ロ)「連」の姓をもつ豪族（大

伴、物部、中臣、土師、服部、鏡作部、玉造部、田部、等の自己の職業を氏の名としたもので、出身を天神系と信じていた)は、世襲的な職能的存在で、軍事的・経済的役割をもち、皇室直属である。これらの豪族は、大和王権成立以前から天皇家に付随していたという観念が想定されており、河内・摂津を地盤にして全国に分布している。なお、天皇家とは密接な婚姻関係はない。以上の「臣」「連」の二元的な氏姓制は、大陸の騎馬民族国家の支配体制における部族的・種族的二元性と対比できるとした。

②騎馬民族の征服の特徴として、渡来人を登用し、外国人への依頼度が強いことである。

③騎馬民族国家に普遍的・特有な天孫の血統による皇位継承法(国家の存続と王朝の存続が一致)がある。すなわち、皇位継承の権利者が多い場合は、いわゆる骨肉の争い(672年の壬申の乱など)が起こる。

④天皇家の婚姻関係や結婚制度(族外婚、姉妹婚、嫂婚制など)も騎馬民族の場合に等しいことである。

⑤北方アジアの騎馬民族では、統治者としての王になるためには天子にならないといけない。そのために、一時的に死ぬか、あるいは気絶し、眼が覚めて再び蘇生した時には天の霊が入り、天子になっているという儀式をする。天孫系の天皇氏は、天の霊を受けて天神になる即位儀礼と、農耕民族の農耕儀礼をすることによって、自己が農耕民族の王でもあることを先住部族に同意させた。すなわち、大嘗祭である。

⑥騎馬民族国家では皇妃が政治・軍事に関与しているが、大和王権でも女帝伝説(持統天皇、神功皇后伝説)がある。

⑦風俗方面では、北アジアの騎馬民族(胡人)の胡服系統の左衽(ひだりまえ)や衣褶着用があり、白衣着用(白衣は騎馬民族の常服・祭服)がある。また、殉死と服喪に際しての自傷の風習(騎馬民族も行っていたが、大和王権はこれを646年にやめさせた)や、動物犠牲(大和王権は791年に禁止)等がある。

Ⅲ 騎馬民族国家論の関連研究分野への波及と補強

1970年代以降、考古学上の発掘は著しいものがある。そのなかで、1972年発掘の高松塚古墳の彩色壁画は、江上によれば、北朝鮮の高句麗の壁に最も近似しているとされ、その女官の服飾・髪型などには高句麗、すなわち夫余系を実証するものがあるとされている。また、1978年の埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文には、江上によれば、天皇側近の重臣の家系の系譜記述様式は居住地・本貫を示さず、すべて親から子への名前の連続による単純な男系系譜が示されているのみであると分析されている。したがって、同系譜記述様式は、定住することがないユーラシアの騎馬民族のみにおこなわれた系譜をふまえているとされる。

(1) 騎馬民族国家論と王朝交替説

ところで、江上の騎馬民族国家論は、大和王権が縄文時代・弥生時代からの日本の中のある単一の政治勢力の自生的発展によって支配権力を確立してきた結果による形成(特に、最初から、畿内において自生的に政治勢力が生まれ、支配権力を日本全国に拡大した)とみるのではなく、特に、古墳時代に先行する弥生人・縄文人との著しい画期をひくものである。それは、いうまでもなく、皇国史観のような天皇家の「万世一系」史観に対立し、古代天皇制国家の大和・飛鳥地域からの自生的起源論をしりぞけ、王朝の交替説(特に、「河内王朝・王権」説等)、邪馬台国東遷論にもリンクするものである。さらに、上述したように、ユーラシア的規模と、東アジア史的視点にもとづき、日本民族の形成と古代日本国家成立の特質と論理を説明するスケールの大きな学説である。

他方、日本民族の形成に影響を及ぼし、日本人の祖先のルーツとして東北アジアを重視する騎馬民族国家論は民族移動や歴史における人間の移動の視点を明確にしたものである。これは、自然人類学の埴原和郎などからも支持された(北方アジア人との関連で、日本列島への民族移動を考える)⁽⁹⁾さらに、環境考古学の

安田喜憲は、4～5世紀にかけて日本で巨大古墳が出現するころは、気候が寒冷化した時代であり、アジア系の遊牧民フン族やキョウドが大移動し、ゲルマン諸族の大移動が始まったとしている。それ故、気候悪化を契機とする民族大移動の東の波の一部が、日本列島に波及した可能性は十分にあると指摘している。⁽¹⁰⁾ また文化人類学・法社会学の江守五夫は、日本の家族慣習（婚姻や葬送儀礼等）における北方アジア文化を重視している。⁽¹¹⁾ このように、王朝交替説や民族移動論を重視する視点は、騎馬民族国家論を避けることはできないものとなっている。

(2) 1980年代以降の騎馬民族国家論の補強

1980年代以降、江上波夫の騎馬民族国家論を補強したものとして、奥野正男『騎馬民族と日本古代の謎』（1987年）がある。同書は、現在、日本列島各地に残っている中型在来馬（御崎馬、木曾馬、対州馬、北海道和種馬等）は、蒙古馬系統とみられ、これらの中型馬は遺伝子研究上から朝鮮半島経由で来たこと等を指摘している。⁽¹²⁾ さらに、江上説ではミッシングリンク（あるべくして欠けている系列上の環）とされていた、中国東北部の騎馬民族南下、初期騎馬民族文化の九州への「伝播」、騎馬民族文化の畿内への東漸、河内の古墳・王権と騎馬民族文化との関連等を整理したものである。

さらに、奥野正男は、古代日本における鉄の生産や鉄器制作にもとづき、通説における5世紀代の地域首長墓から出土する武器・甲冑・馬具等の鉄製品は畿内政権の「全国支配権確立」による独占的・一元的な鉄の生産管理・鉄器製作・配布の結果であるとみる、いわゆる「配布説」を批判している。⁽¹³⁾ たとえば、畿内政権の鉄の「配布説」に対しては、戦争の道具としての武器の所有関係の本質に対する考慮が欠落している（敵対勢力あるいは敵対の可能性のある勢力に戦争の道具を配布あるいは貸与・譲渡することはありえない）と反論している。奥野の批判はもっともなことであり、畿内政権は、物部氏伝承や石上神宮伝承等に見られるように、「配布」ではなく、逆に、服属させた地域豪族から武器を接取し、集中管理していたことが明らかである。そして、奥野はこの種の「配布説」に、対して、各地の鉄製品の出土に関しては、武器・甲冑・馬具・農耕具などと同様に5世紀代に発展した鍛冶・金工技術は、須恵器（陶質土器）、かまど付住居などと同様に、5・6世紀代を通じて、朝鮮半島南部からの渡来集団（各地の新興豪族として胎頭）がもたらした結果であると指摘する。奥野は、鉄製馬具については、渡来集団の騎馬民族文化との関係で考察を深める予定であるが、以上の奥野の研究は江上説を大いに補強しているものである。

IV 古代日本と南朝鮮（加耶）との関係をめぐる考古学的研究の発展

周知のように、近年、古代日本を東アジア全体の動向との関係で解明する研究がすすんでいる。そのなかで、南朝鮮の加耶（加羅・伽倻とも表記される）との関係をめぐる研究がすすめられている。⁽¹⁴⁾ 特に最も注目すべき考古学者上の発掘・調査として、韓国・慶星大学の申敬澈らによる金海を中心とする洛東江下流域の遺跡発掘調査がある。すなわち、3～4世紀代の加耶史を解明するための有力資料を提供しているとされる、金海の大成洞（1990～92年の発掘）、良洞里（1991年から発掘）、鳳凰台遺跡（1992年発掘）、東萊福泉洞の第三・四次発掘調査（1990～91年）、蔚山笠ヶ地区遺跡の第一・二次発掘調査（1991～92年）、などである。これからの発掘調査の概要と特質は、申敬澈の一連の著作等によって、日本にも紹介されている。⁽¹⁵⁾

ところで、江上波夫の騎馬民族国家論の中で、ミッシングリンクとされたものとして、騎馬民族の経由地としての南朝鮮に騎馬民族文化の特質を意味する遺跡等が出土しているか否かという問題があった。また、北九州に騎馬民族もしくは南朝鮮との文化の共有性を示す遺跡等が出土しているか否かという問題があった。これらに関しては、すでに、南朝鮮の上記東萊福泉洞古墳群や池山洞古墳群などで、4世紀末から5世

紀初めに年代が比定される、多数の石蓋墓の群在、騎馬民族的文化の系統とされる鉄製の甲冑・馬具・馬面、刀剣、加耶式陶質土器等が出土した。また、北九州・筑紫においても、福岡市老司と甘木市池の上で、加耶の石蓋墓・副葬品とほとんど一致する内容をもった古墳群が発見された。

そして、近年、江上波夫は上記の申敬澈らの発掘調査に対しても、みずから現地踏査し、本稿注記(3)に収録された「提唱から半世紀 『騎馬民族説』は実証された」の論文において、大成洞古墳群が金官加耶(加羅)に都した東北アジアの夫余系の騎馬民族の王朝「辰王朝」の陵墓であることを考古学上から有力に推定できることを、発掘されたあるいは出土した木槨墓・殉葬・虎形帯鉤(バックル)・オールドス型ケツトル(銅鏡)等を根拠にして強調した(初出は、1991年)。

このようにみると南朝鮮の古代遺跡の発掘調査は、日本古代史研究上においても重要な意義をもち、特に、江上波夫の騎馬民族国家論のミッシングリンクとの関係でも大いに注目される。そういう点で、本稿では、申敬澈の論文を中心にして、木槨墓の構造上の特質や古墳造成の特色等を検討し、被葬者がいかなる政治支配集団であったかを考察してみよう。

(1) 木槨墓の二相について

木槨墓とは、木材資源の比較的豊かなシベリアなどの北アジア方面を起源とするもので、四角の土壌内に丸太や粗削りの木材をもって槨室(棺や遺体、副葬品等を埋納する箱型の空間)を造った墳墓である。金海の大成洞・良洞里、東萊の福泉洞、蔚山の下笠ヶ地区の遺跡は、年代的に併行する木槨墓を主体とする2～4世紀代の埋葬遺跡である。これらの南朝鮮の木槨墓は、従来、楽浪木槨墓の系統として一元的にとらえられてきた。しかし申敬澈によれば、そのように単純でなく、特に金海地域では、特定時期に特定年代の木槨墓を意図的に破壊しつつ、さらに新しい木槨墓が登場していることが強調されている。そのため、申敬澈は、木槨墓の性格と同時期の諸問題を検討するために、墳墓破壊現象が起こる前の木槨墓をⅠ類、破壊をすすめて登場する新しい木槨墓をⅡ類、に分類しつつ考察を深めた。¹⁰⁾

第一に、Ⅰ類の木槨墓の土器資料にもとづく相対年代および、木槨墓造築の意義は次のようにされている。まず、土器文化はそれに先行する前時期木棺墓時につづき、依然として純粋な瓦質土器文化で、楽浪土器文化の波及の結果とされ、上限年代は2世紀末とされている(後漢鏡としての内行花鏡と四乳鳥文鏡および倣製鏡が出土。申敬澈はⅠ類木槨墓をさらに、a b cの三段階に分ける)。木槨墓の構造上の特徴としては、墓壙は浅く、長さ対幅の比率が3対2のように幅広く、木槨は角材で組み立てられ、殉葬の証拠は全く捕捉されていない。つぎに、Ⅰ類木槨墓の築造状態は、前時期の木棺墓の築造状態の延長線上にあり、首長墓は被支配者の墳墓と混在している。それ故、相対的に政治的性格が弱い階層的身分秩序の頂点にある人物の墓として想定される。したがって、Ⅰ類木槨墓は三韓社会(狗邪韓国)内部の自生的な政治的發展の結果による造成と推察される。なお、各々の木槨墓の地域性はみられない。

第二に、Ⅱ類の木槨墓の土器資料にもとづく相対年代および、木槨墓造築の意義は次のようにされている。まず、土器文化は前時期の瓦質土器文化の系統のものも存在するが、初めて陶質土器が出現し、瓦質土器文化を急速に圧倒していく。陶質土器の出現は両晋代における中国北方の土器文化と製陶術の影響とされ、上限年代は3世紀末とされている(申敬澈はⅡ類木槨墓をさらにa b c dの四段階に区分している)。木槨墓の構造上の特徴としては、墓壙の深さがしだいに深くなり、時日の経過に従って墓壙の長さと比較して幅も相対的に狭くなる傾向がある。また、丸太で組み立てられている。さらに、埋葬主体部も大型化し、しだいに主槨に対して独立した副槨が登場し、殉葬や馬(鳥)を犠牲にする習俗が確認される。副葬品としては、わざと曲げた鉄刀、陶質土器、蒙古鉢形冑・挂甲、馬具類、オールドス型銅鏡、長身型鉄矛などがある。申は、これらの木槨墓の構造・副葬品・殉葬の特徴としては北方遊牧騎馬民族の習俗・文化が濃厚であると指摘し

ている。また、Ⅱ類木槨墓の出現が高句麗の南下（314年楽浪滅亡）に先立つ3世紀末という点と、当時の高句麗の墓制（積石塚）の流入がない点で、通説とはことなり、Ⅱ類木槨墓に表現される騎馬民族文化には当初は高句麗と関連がなかったと指摘する。

つぎに、Ⅱ類木槨墓の築造状態としては、支配者と被支配者墓域との厳しい分離がみられることである。すなわち、支配者墓は立地条件が最も良い丘陵の稜線部に立地し、かつ、早い時期の支配者墓から稜線下部でだんだん稜線上部へ向かって築造され、一定の規則性が認定される。他方、被支配者の墓は、立地条件が相対的に悪い支配者集団墓域の周辺（丘陵の斜面）に築造されている。それ故、Ⅱ類木槨墓の首長墓は、政治的身分秩序体制の頂点にある人物の墓と想定される。すなわち、Ⅱ類木槨墓出現から古代国家成り立期という意味での加耶（概念上の金官加耶）が成立し、嶺南地方は同時期から三国時代に突入したと規定できると指摘している。

(2) 木槨墓の転換と支配者集団の交替

つぎに、木槨墓の転換をめぐる支配者集団の特徴はいかなるものだろうか。

第一に、上記のように、Ⅱ類木槨墓は先行墳墓の意図的破壊をともしつつ築造された。これは、死後の世界や死者の埋葬に関するイデオロギーや信仰の急激な転換・変革を示していることはいままでもない。すなわち、Ⅱ類木槨墓が北方遊牧騎馬民族文化的特徴を濃厚に表現していることをあわせるならば、同文化の「受容」ではなく、特定種族の移動および支配者集団の交替を示している。申敬澈は、以上のように、金海地域に突然出現した北方文化の直接原流は、殉葬の習俗にもとずき、夫余にあったと推定し、新支配者集団は夫余と考えることが妥当であろうと指摘した。

第二に、南朝鮮の木槨墓の地域的特質である。Ⅰ類木槨墓時期には地域性が認定されないが、洛東江下流域でのⅡ類木槨墓の出現を契機にして、それぞれ洛東下流域（金海）と、その北部の慶州を中心にして、「金海型木槨墓」と「慶州型木槨墓」に分化するとされている。すなわち、Ⅱ類木槨墓を典型とするものが「金海型木槨墓」とすれば、「慶州型木槨墓」はそこから分離したことになる（殉葬なし、独立した副槨なし）。申敬澈は、以上の慶州（「斯盧連盟」～後の新羅～に加担した地域）を中心にする「慶州型木槨墓」の登場は、洛東江下流域からⅡ類木槨墓に象徴される強力な新支配者集団の突然の出現による緊張の結果とみなすことが合理的であるとしている。したがって、後に、新羅の中枢部に位置する慶州（同地域では、積石木槨墓の埋葬主体施設として「金海型木槨墓」が採用される。この時期に殉葬が取り入れられたことが推定される）では、「金海型木槨墓」を基準にすれば、新羅では遅れて同墓型を採用したことになる。そうだとすれば「金海型木槨墓」は「慶州型木槨墓」に対して相対的に主体的立場にあるので、申敬澈は、『三国史記』にあらわれた歴史像とはことなり、洛東江下流域の政治的集団（概念的には金官加耶連盟が、斯盧連盟（後の新羅）よりも政治的・社会的にも優位にあったと推定している。ただし、加耶の盟主となった金官加耶の支配勢力は5世紀初め頃に、墳墓の築造を突然中断し、突如として消えたとされている。¹⁷⁾

第三に、木槨墓を主体とする墳墓埋葬遺跡調査によって明らかになった当時の南朝鮮と倭（日本）との交渉関係の問題である。申敬澈によれば、木槨墓から出土した倭系遺物（碧玉製石製品、巴形銅器、筒型銅器など）を検討した結果、狗邪韓国（三韓時代、日本では弥生時代後期）は主に北部九州と交渉があり、金官加耶（三国時代、日本では古墳時代）は当時の倭の中枢部の畿内と交渉があったと推定されている。つぎに、加耶地域における古墳（Ⅱ類木槨墓）の出現と日本における定型化した古墳（前方後円墳）の登場時期は軌を一にしていると推定している。その根拠は、双方の代表的な古墳（大成洞29号墳、椿井大塚山古墳）から出土した鉄鏃が極似していることにあるとされている。この点に関して申敬澈はさらに、加耶地域にⅡ類木槨墓に象徴される武装的・戦闘的な強力な支配者集団の突然の出現による緊張が、日本の広域圏での定型

化した前方後円墳の出現の～大和を中心にする各地首長の結集～の一要因になったのではないかと推定している。

以上、申敬徹の南朝鮮洛東江下流域の古代遺跡発掘調査のまとめを紹介してきたが、すぐれて論理的・構造的な展開になっている。いずれにせよ、3世紀末から5世紀にかけての南朝鮮の加耶は、自生的な土着の支配勢力にかわって、新支配勢力が突然登場し、突然消えたことが大きな特徴になっている。同新支配勢力は北方遊牧騎馬民族文化をもった夫余であることはほぼ妥当である。すなわち、江上波夫の騎馬民族国家論において、加耶が騎馬民族の日本列島に侵入する際のステップング・ストーンに位置づけられていることになり、ミッシングリンクがほぼ埋められることになる。

V 騎馬民族国家論に対する誤解等について

(1) 「征服王朝」のイメージに対する誤解

江上波夫の騎馬民族国家論に対しては誤解等が流布している。江上説は騎馬民族征服王朝説とも称されているが、主な誤解の中で特に「征服王朝」の「征服」に関するものが多い。すなわち、それらの大部分の誤解は、「征服」の意味を華々しい恒常的な戦闘活動や膨大な騎馬軍団の編成としてイメージしている。その誤解者の勝手なイメージにもとづき、当時、大量の馬を船に乗せて、数十万を越える騎馬軍団がはたして対馬海峡・朝鮮海峡を渡ったことはありえない、と反論するわけである。たとえば、佐原真は「遊牧民族の王侯貴族が組織的な騎兵隊を持って日本へやって来たということはあるまいと私は考えております」と述べ、¹⁸あるいは、杉本正年は「騎馬民族征服説のような華々しい騎馬戦が日本列島の内部で展開されていたとは考えられない」「騎馬民族が直接大挙して日本にまでやって来たとはどうも考えられない」と述べている。¹⁹

以上に対して、江上波夫は、そもそも、「征服」の意味を上記の誤解者のように考えていなかった。すなわち、江上は、騎馬民族一般の征服と支配の特徴として、騎馬に乗って一年中戦争しているのでなく、土着の豪族と合作して征服王朝を立て、支配者・被支配者の共存共栄の実りをあげつつ支配領域を拡大すると述べている。したがって、騎馬民族は少数者（特に軍事・外交・警察部門をうけもつ）でも支配できるわけである。

すなわち、江上は、具体的に、第一に、朝鮮半島から筑紫への上陸に際しては、「御承知の通り、馬は四歳で成馬になります。それで人間の三代の間には二頭の雄雌から一万頭ぐらゐの馬群になると専門家は言います」「したがって、騎馬民族が朝鮮半島から十数隻の船に十数頭の馬を乗せて、筑紫のどこかに上陸し、そこに橋頭堡を造って、土地の人と話し合って、彼らから一人で、二、三人ぐらゐ嫁さんをもらって二、三代すると、騎馬民族系の人間が数千人になると同時に、馬は数万頭になる。それらがたくさんの船を造って、海上から、あるいは陸上から東征に出掛けて、威風堂々と進軍すれば、土着の人々はおそらく戦わずして靡いてしまったのでしょ。う。」と述べている。²⁰

第二に、筑紫から瀬戸内海を通過して畿内に向かう時には、「彼らが東征する途中の豪族とはなるべく実際の戦闘を避けて、談合による協定によって平和裡に、当時の中央勢力の所在地の大和に直接向うという形をとったと思われます。」と述べ、戦闘を避ける征服・支配の重視を強調している。²¹

第三に、先住・土着の人々と姻戚関係を結んだ場合には、「言葉は子供などすぐ母親の言葉を覚えますから、土着の人と変らなくなり、その血も半分は母方の血を受けてます。二代目では血も言葉も半分半分となって、三代目では半分以上土着の人になってしまいます。四代目では、ほとんど土地の人です。こうやって彼らは、新しい土地で、自分の領域を拡げていくのです」と述べている。²²すなわち、征服王朝国家を建てた騎馬民

族は、人種的・文化的にも支配地の土着のものになり、異民族としての性格も騎馬民族としての性質もやがて喪失し、騎馬民族ではなくなってしまうとされるのである。²³⁾

したがって、江上説に対する前述の誤解の中に、(前近代には)日本人の食生活に騎馬民族の食生活の風習(肉食、牛乳、チーズ等)が根づいていなかったのではないかと、いうものがあるが、これは江上説に対する反論にはならない。すなわち、騎馬民族が先住・土着の女性と結婚した場合には、その子どもの味覚・嗜好等は、どうしても母親のものに似てしまうことになるので(いわゆる農耕民族の「おふくろの味」を好み、肉食等は疎遠になる)、騎馬民族としての伝統的な食習慣が薄まることは当然である。

(2) 安本美典と佐原真の《騎馬民族は来なかった》という書名の著作について

江上波夫の騎馬民族国家論に対して、近年、《騎馬民族は来なかった》という書名の二冊の単行本が刊行されている。すなわち安本美典と、²⁴⁾佐原真のものである。²⁵⁾しかし、これらの二冊は江上説に対する誤解にみちており、「反論」になりえない。

安本美典は、たとえば「大嘗祭は、南方稲作民族の伝統をうけつぐ農耕儀礼のように思える。これはどうみても天皇家が、北方騎馬民族の出身であるとする江上説の主張に合わないものである。」と反論する。しかし、本稿で江上説を紹介したように、江上説においては天の霊をうけて天神になる儀礼(北方アジア騎馬民族に特有の儀礼)と、農耕民族の農耕儀礼をすることによって、自己が農耕民族の王であることを先住勢力に同意させる儀礼として大嘗祭が位置づけられている。したがって、江上説における大嘗祭の二重性格を批判しなければならないが、安本は批判していない。

安本美典は、騎馬民族が朝鮮半島から日本に来たのではなく、日本が朝鮮半島に出兵したという主旨のもとに、たとえば、中国の『宋書』における「使持節都督、倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王」という倭国王の官爵除授請求記述に関して、次のように述べている。すなわち、同記述は「日本の軍事的支配権が朝鮮におよんでいることを、客観的存在である中国がみとめている。これは、倭王武を雄略天皇であるとし、その数代まえの神功、応神のころ、日本の朝鮮半島への軍事的進出があったとすれば、きわめて自然に理解できる。」と指摘する。これに対して、江上説では、上記で紹介したように、同時期には存在しない南朝鮮の三韓時代の国(弁韓をのぞく)が含まれている点にもとづき、夫余出身の辰王の系譜につながる倭国王(その祖先)が三韓時代にその支配権を三韓全体に及ぼしたという見解をとっている。したがって、『宋書』等における倭国王の官爵除授請求記述に関しては、江上説における倭国王(その先祖)の系譜論を批判しなければならず、安本は同系譜論を批判していない。

なお、安本は、朝鮮の『三国史記』における「倭」の文字(「倭国」「倭人」「倭兵」)が日本をさすとしているが、「倭」を単色的に「日本」と同一と考えてよいだろうか。安本によれば、①戦闘および不和の文脈の中に「倭兵」「倭人」があらわれるのが多く、②友好的国交関係においては「倭国」「倭王」が使用されているようである。この場合、①はむしろ、倭(人)の私戦・ボランティア的な襲撃や戦闘行動が中心的であり、②は国家としての公的な行為であることは明白である。それ故、①②の各々にあらわれた「倭」なるものが、「日本列島」のどの地域を勢力基盤にしていたのかを明らかにしないかぎり(すなわち、国権の発動としての行為であるのか、あるいは某地域勢力政権の発動としての行為なのか、等の区別)、安本の言及は無意味なものになる。他方、江上説では、たとえば、「倭韓連合国」(南朝鮮の任那・加羅と北九州の勢力の合体)としての「倭」と、畿内王権としての「倭」とを区別している。

今日、「倭」に関しては、井上秀雄などにおける詳細なカテゴリー分析の研究がある。²⁶⁾それ故、「倭」に関しては、単純に、倭→大和王権→日本列島、のように拡大してとらえることはできず、それぞれのレベルやカテゴリーを設定して考察することが重要である。

つぎに、佐原真は、「騎馬民族は必ず馬の去勢を行う」という誤解にみちた仮説のもとに、前近代までに日本には馬の去勢がなかったのではないかと主張し、騎馬民族は来なかったと反論している。しかし、佐原は主旨が一貫せず、馬の去勢については同書で「古代の日本に馬やその他の家畜を去勢したかしないかは、騎馬民族説の証明にも反証にも、実は関係がないことなのであります。」とあっさり撤退している。佐原は同書で動物去勢に関して精力的な言及をしているが、騎馬民族国家論の論理構造においては非本質的なものであり、佐原の言及自体は大きな意味はない。ちなみに、川又正智によれば、アッシリアの軍隊では雄の去勢をしていない馬を使うとされている。²⁷⁾

安本美典や佐原真などには、「騎馬民族は来たか、来なかったか」というビジュアルな日常行為レベルでの議論の構えがある。しかし、そうしたレベルの議論は、江上説における古代日本の民族の形成と国家の起源の区別と関連する根幹部の論理構造に対する批判として構成されなければ、大きな意味はない。

VI 高校日本史教科書における騎馬民族国家論の位置づけと記述

高等学校の地理歴史の教科の日本史教科書における古墳時代の記述を検討してみよう。²⁸⁾日本の国家の成立（大和政権・大和王権）と対国際関係からみた場合の記述の特色は、畿内を勢力基盤にした大和政権が同地域の豪族の政治的な連合により、しだいに支配地域を拡大し、朝鮮半島における軍事的接触によって大陸等の文化を取り入れたとする視点多いことである。すなわち、大和（奈良県）の土着勢力の自生的・自力的成長と発展による政権確立・拡大史観と、朝鮮半島進出史観にもとづくものが多い。

たとえば、山川出版社（石井進他）は、「出現期の古墳のなかでもっとも規模の大きなものは、大和（奈良県）にみられる。このことは、この時期の政治的な連合が大和をはじめとする近畿地方の勢力が中心になって形成されたものであることを物語っている。この大和を中心とする政治的な連合を大和政権という。古墳はおそくとも4世紀の中ごろまでに、東北地方中部にまで波及し、東日本の広大な地域が大和政権に組み込まれたことを示している。」「当時、高句麗の都であった丸都（中国吉林省集安県）にある高句麗の好太王の碑文には、倭が高句麗と交戦したことが示されている。高句麗の騎馬軍団との戦いは、それまで乗馬の風習のなかった倭人たちに、いやおうなしに騎馬技術を学ばせたようで、5世紀になると日本の古墳にも馬具が副葬されるようになる。またこの戦乱をのがれた多くの渡来人が海を渡って、さまざまな技術や文化を日本に伝えた。」（ルビ等を省略）

と記述している。²⁹⁾ただし、古墳の副葬品を前期と中期以降に区分し、前期では「鉄製の武具や農工具のほか、銅鏡や玉（勾玉・管玉）・剣・碧玉製腕飾りなど、呪術的性格のものが多く副葬されている。このことから前期の古墳の被葬者は、まだ司祭的な性格を残していたことがわかる。」と記述し、中期以降では「中期の5世紀中ごろから、副葬品は刀剣・甲冑などの鉄製の武器・武具や、鞍などの馬具が多くなり、その意匠には北アジアの騎馬民族に広まったスキタイ文化や、高句麗などの影響も、少なからずみられる。」と記述している自由書房はやや特筆に値する。自由書房は、注記において、「この副葬品の変化などを根拠として、東アジアの北方騎馬民族が、朝鮮半島を経て日本を征服し、王朝をたてたとする騎馬民族説もとなえられている。」と騎馬民族国家論を紹介していることも注目される。さらに、自由書房は、「古墳文化の時期区分」を形態・分布・内部構造・副葬品・埴輪の特徴にもとづきまとめあげ、中期に関しては「異文化の到来（騎馬民族?）」と添書きしていることは評価されよう。³⁰⁾

以上、高校日本史教科書を検討したが、騎馬民族国家論の位置づけと記述は非常に少ない。しかし、今後の考古学上の発掘や文化人類学・自然人類学等の研究の進展を考えた場合、騎馬民族国家論は日本古代史教育において無視できないものになるだろう。

(注)

- (1) 拙稿「社会科古代史教育における古代中国思想の位置づけ」『北海道教育大学紀要』第一部C, 第42巻2号, 220ページ, 1992年2月.
- (2) 注記(1)の拙稿で示した①の稲作農耕文化にかかわるテーマに関しては, 拙稿「社会科古代史教育における稲作文化の教材研究」『北海道教育大学紀要』第一部C, 第44巻第1号, 参照, 1994年7月.
- (3) 江上波夫『江上波夫の日本古代史——騎馬民族説四十五年』1992年, 大巧社, に再録されている.
- (4) 本稿は, 江上波夫の騎馬民族国家論のテキストとして, 江上波夫著『騎馬民族国家——日本古代史へのアプローチ』(初版1967年, 1988年第49版)を使用する. 同書の目次概要は,
- 1 騎馬民族とはなにか
 - 騎馬民族とその活躍舞台
 - ユーラシアにおける騎馬民族
 - 2 日本における征服王朝
 - 日本国家の起源と征服王朝
 - 日本統一国家と大陸騎馬民族
 - 日本民族の形成
- である.
- (5) 江上波夫の騎馬民族国家論に対する代表的な賛否論は, 1970年代前半までは, 江上波夫他著・鈴木武樹編『論集 騎馬民族征服王朝説』1975年, 大和書房, に収録されている. なお, 江上波夫の古代研究・民族学研究・考古学研究・ユーラシア大陸文化研究等は膨大なものであり, これらは『江上波夫著作集』(全13巻, 別巻1巻, 1984年, 平凡社)として刊行されている.
- (6) 江上の騎馬民族国家論は, その後, 不十分なところが新たな考古学上の発掘等の進展によって埋められている. 江上説の1990年代の著作としては(注記(3)に収録されたものを除く), 「騎馬王朝説から四十年」読売新聞大阪本社編『騎馬民族の謎』(1992年, 学生社), 「騎馬民族説は実証された!」文芸春秋編『幻の加耶と古代日本』(1994年, 文春文庫ビジュアル版), 等がある. また, 江上波夫・森浩一『対論・騎馬民族説』(1982年, 徳間書房), 江上波夫・佐原真『騎馬民族は来た!?! 来ない!?!』(1990年, 小学館)がある.
- (7) 注(4)の169~170ページ.
- (8) 注(4)の355~359ページ.
- (9) 埴原和郎「民族移動と日本人のルーツ」注(6)の『騎馬民族の謎』53ページ. なお, 日本列島におけるシベリア文化の影響として, 1万3~4千年前を境にした細石刃文化の出現がある(加藤晋平「日本とシベリア文化」埴原和郎編『日本人の起源』58~72ページ, 1986年, 小学館). 細石刃文化とは, 幅1センチメートル以下の縦に細長い石のかげら細石刃を, あらかじめ打ちかいて整えておいた石の塊(細石刃核)から多量に剥がしとる技術をもった石器文化で, 人類が二百万年以上かけて, 最終的に到達した最高の石器技術とされる. 日本列島における細石刃文化段階(特にクサビ型の細石刃)は, ナウマン象などの大型哺乳動物がほぼ絶滅した後に相当し, 中型動物群の狩猟の上に成立し, 東日本では河川漁撈も生業の中に組み立てられたものとされている. これらの石器の出土は, 石器のみが移動したとは考えられず, 石器をつくりだす技術をもった人間集団が移動・拡散した結果を示している. 加藤晋平によれば, 以上の, クサビ型細石刃は, 3万年前沿バイカル・ザバイカル地方で生まれ, アジア大陸に広く分布し, 2万年ほどの年月をかけて東方に拡散し, その一派が北海道や東北日本に至ったとされている. 加藤の仮説は, 近年の松本秀雄らの人類遺伝学における日本人集団にみられる免疫グロブリン(抗体)の血液型——Gm型遺伝子——の頻率分布の研究に一致しているとされている. 松本秀雄の研究によれば, 日本人集団は北方型蒙古系集団に属し, そのルーツはシベシア, 特に, バイカル湖畔にあるとされる(松本秀雄『日本人は何処から来たか』177ページ, 1992年, 日本放送出版協会). ただし, 遺伝子レベルの頻率分布の研究では, 同遺伝子がいつ入ってきたかという時期が特定できにくい.
- (10) 安田喜憲「日本民族と自然環境」埴原和郎編『日本人新起源論』159, 233ページ, 1990年, 角川書店. また, 安田は, 疫病と民族移動との関係で, 江上波夫の騎馬民族国家論に賛意を示している(安田喜憲「騎馬民族は来た?」安田喜憲・松岡敷充編『文明と環境II 日本文化と民族移動』147~149ページ, 1994年, 思文閣出版).
- (11) 江守五夫他『日本の家族と北方文化』1993年, 第一書房.
- (12) 奥野正男『騎馬民族と日本古代の謎』13ページ, 1987年, 大和書房.
- (13) 奥野正男『鉄の古代史 2』226, 7ページ, 1994年, 白水社.
- (14) 鈴木靖民他『伽耶はなぜほろんだか』(1991年, 大和書房), 上田正昭編『吉野ケ里・藤ノ木と古代東アジア』(1991年, 小学館), 江上波夫・上田正昭編『シンポジウム 東アジアの再発見 謎の五世紀を探る』(1992年, 読売新聞社), 鳥越憲三郎『古代朝鮮と倭族』(1992年, 中公新書), 西嶋定生他『巨大古墳と伽耶文化』(1992年, 角川書店), 朝日新聞社編『日朝古代史の謎』(1992年, 朝日新聞社), 小田富士雄他『伽耶と古代東アジア』(1993年, 新人物往来社), 諏訪春雄編『倭族と古代日本』(1993年, 雄山閣), 文芸春秋編『幻の伽耶と古代日本』(前出, 注(6)), 鳥越憲三郎『弥生の王国』(1994年, 中公新書), 等がある. これらの多くは, シンポジウム等も収録されている.
- (15) 日本の刊行物に掲載された申敬激の著作としては, ①「五世紀, 金海の支配者たちはなぜ消えたか」『月刊 Asahi』1991年6月号,

朝日新聞社, ②「大成洞古墳の概要」『東アジアの古代文化』第68号, 1991年7月, 大和書房, ③「五世紀代における嶺南の情勢と朝日交渉」注⑭の江上波夫・上田正昭編所収, ④「四・五世紀代の金官伽耶の実像」⑭の西嶋定生他著所収, ⑤「金海加耶の遺跡と出土遺物について」『東アジアの古代文化』第71号, 1992年4月, 大和書房, ⑥「最近加耶遺跡の出土遺物の解釈をめぐる若干の問題点」『東アジアの古代史』第72号, 1992年7月, 大和書房, ⑦「韓国考古学の最近の成果に対する一視角」『東アジアの古代文化』第74号, 1993年1月, 大和書房, ⑧「加耶成立前後の諸問題」注⑭の小田富士雄他著所収, 等がある。本稿は, 上記の申敬澈の⑧の著作を中心に検討する。なお, 申敬澈らによる大成洞古墳等の発掘調査の一部は, 1992年9月2日に, NHK教育テレビ「現代ジャーナル『よみがえる古代王国伽耶文化の語るもの』」で放映された。

⑩ 注⑮の⑧の116ページ。

⑪ 注⑭の文芸春秋編『幻の加耶と古代日本』111ページ, 座談会(大塚初重・申敬澈・鈴木靖民), 参照。

⑫ 佐原真「考古学からみた日本民族」注⑩の埴原和郎編所収, 118~119ページ, 同「騎馬民族征服王朝説への疑問」注⑥の読売新聞大阪本社編所収, 119ページ, など。

⑬ 杉本正年『日本基層文化の整理学』108, 212~213ページ, 1987年, 文化出版局。

⑭⑮ 『江上波夫著作集』第8巻, 190, 200~201ページ。初出は1979年。

⑯ 注⑥の江上波夫・森浩一著, 134ページ。

⑰ 周知のように1784年に今日の福岡市志賀島から出土した「漢委奴国王」の金印がある。同金印には, 印鑑を佩帯するために綬を通す鈕がつけられているが, その鈕は蛇の形をしたもので蛇鈕(だちゅう)と称されている。ところで, 同金印に近似した蛇鈕のある「瀛王之印」が中国雲南省石寨山古墳から出土した(前109年に漢の武帝が瀛王に下賜したものと推定されている。漢は, 周辺の異民族の国王に, 当該民族に特有な動物の形の鈕をつけた印鑑を下賜したようである)。そういう点で, 古代の瀛王国は日本・中国の考古学上から注目されているが, 最近さらに李家山の発掘調査がすすめられ, その一部が, 1994年8月11日のNHKテレビ「弥生幻想紀行・秘境雲南・瀛王国墓発掘『よみがえる謎の古代稲作王国』」で放映された。同テレビ放映によれば, 瀛の地域は古代から稲作農耕民族が住んでいるが, 瀛王族の木槨墓から多数の金製品(鞘かざり, 馬の形のかざりもの)や馬具等が出土されており, 瀛王族が北方騎馬民族と深い関係をもっていることが指摘されている。これによれば(北方騎馬民族が同地域に移り, 王様になったとすれば), 北方騎馬民族が稲作農耕民族にとけこんだ事例としての意義をもち, 時代は下がるが, 江上波夫の騎馬民族国家論の論理を補強することになる。

⑱ 安本美典『騎馬民族は来なかった!』1991年, J I C C出版。

⑲ 佐原真『騎馬民族は来なかった』1993年, 日本放送出版協会。

⑳ 井上秀雄『倭・倭人・倭国』1991年, 人文書院, 同「倭と『日本書記』」『東アジアの古代文化』第71号, 1992年4月, など。他に, 李鍾恒著『韓半島からきた倭国』(兼川晋訳, 1990年, 新泉社), 豊島静英「倭という名のいわれ」『歴史評論』1994年2月号, 校倉書房, 参照。

㉑ 川又正智「古代騎馬術の伝播と変遷」注⑩の安田喜憲・松岡敷充編所収, 132~133ページ。

㉒ 1994年度用高校日本史教科書として, 中村政則他『新版 高校日本史』日本書籍, 直木孝次郎他『日本史B』実教出版, 石井進他『詳説 日本史』山川出版社, 坂本覚三他『新日本史B』第一学習社, 江坂輝弥他『新日本史B』自由書房, 児玉幸多他『日本の歴史』山川出版社, を検討した。以下, 出版社名を記述する。

㉓ 山川出版社(石井進他), 23, 26ページ。なお, かつて, 山川出版社の『詳説 日本史』(改訂版, 井上光貞他著, 1989年発行)などは, 騎馬民族国家論に対しての言及は皆無であったが, 山川出版社(石井進他)では, 欄外注記において「古墳時代の前期と中期以後とのあいだに文化的断層を認め, 中期古墳の持つ軍事的性格を, 大陸北方の騎馬民族による征服の結果と考える説もある。」(26ページ)と記述している。これは, 江上波夫の騎馬民族国家論が古代史研究において重要な影響を及ぼしていることを無視することができなくなったことによる記述であろう。

㉔ 自由書房, 26ページ。

(1994年8月13日脱稿)(本学教授 函館校)